



鮎釣の竿低めては立て直し  
 青やませ死を賭すに足る戦とは  
 夏惜しむ追浜おつばまは汝の少年期  
 船虫に逃げ遅れなしここ葉山  
 マティーニに晩夏の銀座昏れてゆく  
 三方に山滴れり母の忌来  
 梅雨のなき遙か哲学者の道よ  
 千枚田土用とんひ鳶の身じろがず  
 なめくぢり月亡き夜を狂ふとよ  
 空といふ巨き鳥籠梅雨曇  
 梅雨の月ふつと高濱六のこと  
 湖の面の仕舞去るごと夏の暮  
 校注六百四十と一火取虫  
 能登に酒搾る卯の花腐しかな  
 早苗田や畦豆の穴開ける役  
 ジャカラきりもどきランダ桐擬とはぞんざいな  
 小林貴子  
 佐藤映二  
 国見敏子  
 堤保徳  
 岩井かりん  
 満田光生  
 清水道径  
 川村五子  
 野口美智子  
 志摩晴樹  
 辰野利彦  
 吉沢さよ子  
 島田謙吉  
 丸山盛久  
 市川敬子  
 大月英晴

雨休みこれから好きになる本と

佐久間梨江

\*

十万の朝顔のあり爆心地  
 冷素麵あきらめし頃叶ふこと  
 源氏名のあらば鳥の名髪洗ふ  
 齒ぐたへのなき枝豆やジャズの夜  
 思ひつきり踏み出す一步明易し  
 琥珀とふ永久の揺り籠蟻眠る  
 空蟬に抱かれ真言地に還る  
 放課後の夕立や廊下走りたし  
 サングラス寂しがりやを隠しけり  
 卒業の証書と似たり蟬の殻  
 花と葉に別の風吹く花菖蒲  
 木下闇今のあなたに逢ひたきよ  
 優しさをかき消すやうに髪洗ふ  
 穂苅真泉  
 玉木愛子  
 田中優子  
 二階堂なつみ  
 池間キヨ子  
 湯舟まこと  
 岩上諒磨  
 篠遠早紀  
 濱野洋子  
 三谷正男  
 大崎弘子  
 藍葉町子  
 若月はっ江

巻頭言 第十四句集『鑑真』を上梓した。自分中心の意識から離れたい思いがあった。その前に、『俳句表現 作者と風土・地貌を楽しむ』（平凡社）を出して貰った。「一楽しむ」シリーズのまとめ、第三弾。冒頭をお借りして、出す方よりも、読んでくださる側の皆さんに平身低頭してお礼を申し上げます。

日常の感性は、確かに取り戻すまでに時間がかかる。若い時の感性とは違う。今夏、盆休みに娘家族と乗鞍高原の滝見に行った。番所大滝の急坂が降りきれない。善五郎滝も途中までで用心した。普段、机の前にいるのとは違う。足腰が弱っていることを改めて自覚した。頭と足の落差が大きい。にわかには、どんぐりの木や樺の樹間の涼味が迫ってきた。まだ行ける、大丈夫との変な自信が錯覚であることを実感したのである。自然は変わらない。大きい。ああそれなのという感慨。

『何でもない地名の魅力』「追浜は汝の少年期」

夏惜しむ 追浜は汝の少年期 国見 敏子

夏が終わる。暑い夏であるが、せいせいする反面、今年の夏も終わりという多少の感慨もある。「追浜」は、作者以外には何でもない地名に違いない。私は、かつて、国見三郎さん（後見人として苦労するという意から後見九郎がペンネーム）が横須賀生まれ、横須賀育ちと聞いていた。今回、「追浜」とは初めて聞く。浦賀行京急電車の金沢八景の近く、横

虫に目がとどかない。

マティニーに晩夏の銀座昏れてゆく 岩井かりん

ジンを生かしたカクテル。口に当てると、夏の終わりの銀座の黄昏。ああ、もう一度口に。暮れてゆくイルミネーション。ちょっと疲れた、晩夏とは何かの終わりの一時と気づく。

三方に山滴れり母の忌来 満田 光生

故郷会津での母の法事の思いか。母が亡くなる。だんだん実感に襲われ、納得せざるを得なくなる。高校教師の母が期待したわが身。子からみても行き届いた母であった。風景の完璧な落ち着きがそう感じさせる。悼句にして秀句である。

梅雨のなき遥か哲学者の道よ 清水 道徑

先年、五年前の六月初旬、ドイツへ行った。私も共に歩いたハイデルベルグのネッカ河の畔の「哲学者の道」か。ヨーロッパには梅雨がない。暑い日であった。これがカントの思索の道かとおしゃべりしながら四十分ほど、人の家の庭を覗きながら歩く。石ころ一つにも歴史を感じるのが愉快だった。

今月の秀句

湖の面の仕舞去ること夏の暮 吉沢さよ子

狂言の主人公が舞台から去る。あとはしばらくぼんぼんと鼓が響く。そして幕。夏の、たとえは諏訪湖の夕暮とは上記の舞台のごとしとか。巧みな連想であろう。激しい昼間との対比が陽画に対して陰画。芸が見えて余裕ある句。日頃の着眼、表現ともに諏訪の実力派である。

須賀市の北端に当たる。自然が豊かな地であることが亡き九朗さんの茫洋たる大人の風格にぴったり。「おっぱま」というどさくさまぎれの音感がいい。地名に気づくと句もまたよくなる。

鮎釣の竿低めては立て直し 小林 貴子

鮎釣をしている。低めに竿を構える。知らない間に竿がもつと低くなる。気づいてまた幾分高めに構える。微妙な竿の上げ下げが鮎には伝わる。私も若き日に千曲川での鮎釣の経験があるのが今になると嬉しい。「低めては」がいい。なにことも経験が大事なことをふと思い返している。

青やませ死を賭すに足る戦とは 佐藤 映二

「青やませ」とは夏の東北地域の冷湿な北東風。きびしい風だ。「死を賭す」とはまさに特攻精神。本来そんな戦があるのか。何を目的に戦うのか。みんなの幸せが人類の幸福に通じるのであるならば、戦とは自己矛盾も甚だしい。作者はその点を追及している。わが日本が犯した誤った戦から只今の世界で止まない闘いまで。宗教が絡むと事態は難しい。

船虫に逃げ遅れなほこ葉山 堤 保徳

葉山の船虫の足の速さは抜群。津波の比ではないほどだ。地名「葉山」が効いている。スマートなのである。我関せずと逃げるのみ。葉山の住民のことを連想しているのではない。葉山ということばの軽さ。船虫も身軽。嘘だと思ふなら他の地名を置いてみるがいい。ここ房総、だめ。ここは博多、船

千枚田土用鷺の身じろがず 川村 五子

能登の曾々木の千枚田であろう。時は土用。虚空に鷺。震災後の風景がどこかきこえない。完全に復旧していないのではなにか。自由に羽搏けない鷺がその象徴か。手応え充分な作。

なめくぢり月亡き夜を狂ふとよ 野口美智子

想像もしなかったなめくぢの自在な一面の指摘に感銘した。のろのろ、慎重な蛞蝓が無月に狂乱状態になるとは。生物はみかけによらない、無視できないものだ。

空といふ巨き鳥籠梅雨曇 志摩 晴樹

「ぞら」でも「から」でもない。何も無い「くう」だろう。「巨き」からの連想である。宇宙は鳥籠である。すると、人類も籠の鳥。しかも空は梅雨曇。松井須磨子の籠の鳥は人情細やかな演歌。これは仏教の教義に迫る宇宙哲学。鳥籠が見えないのがミソ。抜け出すにはどうしたらよろしきや。

梅雨の月ふつと高濱六のこと 辰野 利彦

虚子の六女、六。三歳で逝去。生まれながらに弱く、足腰が立たず、肺炎に重ねて脳も悪くして亡くなった子で、短編「落葉降る下にて」に書かれている。ありのままを見つめる虚子の冷酷ともいえる死生観が滲む話。掲句も眩きような作である。梅雨最中の晴れ間の月は一縷の支えか。

校注 六百四十一と一火取虫 島田 謙吉

前書に「井田進也校注岩波文庫『一年有半』」とある。灯下で中江兆民の上掲書を読んでいる。一九〇一年、喉頭癌で

一年有半の余命を宣告された兆民が社会批評から文学論、人形浄瑠璃まで、思う存分に書いた書。当時のベストセラーで、子規も読み、厳しい評を書いた。同じ痛に罹った作者の謙吉さんも、詳しい注まで首っ引きで本書に向かう。読み終わってであろうか。七月十五日逝去、九十歳。本誌とは短い出会いであったが、毎月推薦句。句は天才的に巧みであった。さらに命があったならばと惜しまれる。

能登に酒搾る卵の花腐しかな 丸山 盛久

旧曆卯月、卯の花が咲く頃の雨が卵の花腐し。能登での醸造はその頃行われるものか、私は知らないが、能登での酒造の物語は連想できる。風土色というよりもロマンを感じる。

早苗田や畦豆の穴開ける役 市川 敬子

かつては田の畔に畦豆を植えた。小学生の手伝いが穴開けとは、私にも承知の光景だ。猫の手も借りたい頃だ。

ジャカラランダ桐擬とはそんなさいな 大月 英晴

中南米原産の紫のジャカラランダの花がキリモドキ属に分類

### 今月の素句

十万の朝顔のあり爆心地 穂苅 真泉

広島でも長崎でも真からの復興への願いは核禁止。朝顔が一斉に花開き叫びをあげる。その爽快さを目に浮かべ、作者の作句力の意欲が本物になってきたことを喜びたい。いよいよ活躍さかりである。評論文にも力を入れてほしい。

て達成したと聞く。スペイン語はプロ級？ 謎があるところが魅力。俳句は自在。生き方にも魅力がある。

思ひつきり踏み出す一步明易し 池間キヨ子

作者は九十一歳、宮古島に在住。その意気や尊し。長生きとは氣力そのもの。まず踏み出すことである。

琥珀とふ永久の揺り籠蟻眠る 湯丹まこと

深遠な作。琥珀の中に蟻が永遠の眠りに入っている。蟻でよかった。

空蟬に抱かれ真言地に還る 若上 諒磨

すごい句だ。私もこんな句を詠みたいと思うが、難しくなる。私は苦吟にしよう。諒磨はさらさらと手軽に詠む風情を持っている。これは天才級。真言が空蟬に抱かれて大地に戻る。名僧の真言も地から生まれ地に還る。具体的に鑑賞したいが、真意が伝わらないので止めておきたい。

放課後の夕立や廊下走りたし 篠遠 早紀

新卒の高校の先生。担当の授業がぎっしり。カリキュラム表をばおと眺める。この氣持が痛いほどわかる。放課後、生徒が帰った後の長い廊下を夕立と走りたい。わああーっと。

サンゲラス寂しがりを隠しけり 濱野 洋子

ファッションのサンゲラスではない。わが保身用。話すことさえ冷や汗が出るような性格の人物像。素直な作には時に大胆なところがあり、面白い。

卒業の証書と似たり蟬の殻 三谷 正男

されるという。分類にどんな決まりがあるのか知らないが、「桐擬」とは桐の花に似ているという意。確かにおぎなりな感じがする。知的な一つの気づき。こんなことでも俳句になる。これが俳句という決まりがあるわけではない。いろいろな試みから自分の作り方を見つけるのである。

雨休みこれから好きになる本と 佐久間梨江

「雨休み」は日照りの後の喜雨休み。これを読みたいという本が見つかったものか。弾んだ思いが伝わる。表現が柔軟で楽しい。本好きな中学生か高校生くらい。淡い夢がある。

### 体験を重ねて気づくことに意外な知恵がある

冷素麺あきらめし頃叶ふこと 玉木 愛子

具体的なことはわからないが、私の例でいうと、探していた本が手に入らないとあきらめかけていた頃になって見つけることがある。「冷素麺」から、生活上の人生途上の出会いかもしれない。年配者が気長に求める心に共感を覚える。俳句歴が長く情熱を秘めたベテランである。根が若々しい。

源氏名のあらば鳥の名髪洗ふ 田中 優子

粹だ。「わたし驚、どうぞおみしりおきを」と攻められれば大方はころり。艶がある。勤めが終わり深更に髪を洗う。想像するだけで、手前もルンルン。「一匹」の貴重な俳人。裏切らぬものにバナナと筋肉とにも注目した。

齒ごたへのなき枝豆やジャズの夜 二階堂なつみ

真のある知恵の俳人。「百年の孤独」の独自訳を五年かけ

卒業証書は蛻の殻。生身のわが身はるるん。後年になると、蛻の殻も懐かしくなる。

花と葉に別の風吹く花苜蓿 大崎 弘子

美しい句である。よく見ている。風はやさしく、花の氣持、葉の氣持がわかるのであろう。見えない心が風にはある。

木下闇今のあなたに逢ひたきよ 藍葉 町子

亡き夫はいまどこに何をしているのか。逢いたい。永遠の願い。願いはどこかで叶うのではないか。次第にそんな氣がしている。

優しさをかき消すやうに髪洗ふ 若月はつ江

髪を洗う行為は激しい。今日の出会いを消して、明日の新たな出会いのために。嫌なことも髪を洗うと消される。髪は生きている。

他に推薦候補作をあげる。

竹婦人抱けば風の音すなり 坂本 昌子

すてこのをとこあまたがこをどりす 高橋 秀雄

戸隠古道あゆむ身ぬちに滝飛沫 河合 照子

一山は獸のうねり青嵐 石井紀美子

はち切れさうや山巔の水旗 林 節子

花火持つ人ことごとく獣めく 高橋 節子

祖母は掌に虹あると言ふ夜の秋 曾根原とうこ

夏至の日や未完の思ひ抱へつつ 西澤日出樹